

六 花

月刊俳句雑誌りっか
chairman yamada rokko
secondary chairman &
the editor in chief kotori
designed by little bird

6月号

2008

輪

山田六甲

ほととぎす鳴きつつ方を眺むればただ有明の月ぞ残れつ

後徳大寺左大臣（八一巻）

『千載集』夏・一六一

ほ ほぐしつ つ 蕙むしろに 広ぐ 夏わらび
と 虎刈りの子に 託たくさるる 捕虫網ほちゆうもう
と 時計見て 河原へ 下りぬ 螢狩
ぎ ぎりぎりに 畦あぜを残して 田水張る
す 砂場から 水を 掻かい出す 五月晴さつきばれ
な なで 肩のまま 老境に 藍あゐゆかた
く 切り傷のある ふくらはぎ 宿浴衣やどゆかた
つ 注つぎ足たしの 麦酒ビールに 酔うてをりにけり
る 留守番に 大きな 西瓜すいかあてがはる

か 蚊遣香燃え尽き用を足しに立つ
た 頼りなき脚立の上に枇杷する
を をとこらが酒の注ぎ手や雨祝
な 長滝の水を曲げたる兜岩
が 墓がまがえる 飛びのくでなし座ざすでなし
む 麦の奥明るく透けてをりにけり
れ 礼服を脱ぎ捨て見やる金魚玉
ば 馬鹿役の早苗なぶ餐夫り夫婦話かな
た 田蛙たかわずの雨の道路を渡りけり
だ 抱き上げて襦袢むつぎを嗅かげる若葉わかば冷びえ
あ 味気なきトマトを選みてしまひけり

雪華抄

ことり

ほ 頬ほお 伝 ふ 洗 び し 髪 の 滴しずく かな
と 解 ぎ 放 つ 肌 に 香 水 立 ち 上 る
と 鳥 ゆ く や 若 葉 冷 なる 空 の 果
ぎ ぎ り ぎ り と 巻 きて 上 げ て 結 ぶ 洗 び 髪
す 砂 浜 に 影 を 落 と せ る 梯デイゴ 姑 かな
な 鳴 り や ま ぬ 鼓 動 汗 ば む 肌 の 下
く 利 ぎ 酒 に 浴 衣ゆかた の 崩 れ ゆ き に け り
つ 月 赤 く 昇 り 不 如 歸ほととぎす の 鳴 け り
る 鏤るきん 金 なる 櫛 撫くしな で て を り 鶯さぎ 鳴 く 夜
か 肩 抱 かる 汗 ば む 厚 きて の ひ ら に

滝音の飛沫となりてをどり来る 小寺ふく子

堰落つる春水泡と変はりけり

滝の水重さ軽さの交じりけり

滝音や峡の景呼ぶ心地して

鮎の水岩を叩きて流れけり

たきおとのしづきとなりておどりくる

掲句が迫力を持つのは五官を全て使って滝の本質を捉えたからである。「をどり来る」というところが作品の焦点で、音としづきとが合い交じって大太鼓を打つように迫ってくるのを肌で感じ取った。だから読者にも滝の躍動感がそのまま伝わって来る。主観写生の見本のような句になった。

因みにこれは佐用初めての吟行句会での作品。写生は強い。

水色に暮れゆきにけり雪の果 三井 孝子

水底に木漏れ日冬のプールかな

石嚙みしまま果てにけり春の雪

雪積もる田に捨てボート日本海

仮名書くや雪解の水で墨を磨り

みづいろにくれゆきにけりゆきのはて

雪の果とはその冬の最後に降る雪で雪の名残一雷の別れ。などという。掲句は滝の句のような派手さはないが雪の積もった夕暮れに一瞬だけ青みがさす。そこを逃さず捉えた鋭い感覚が光っている。これもまた、写生の強み。頭の中だけで句を捻っていたのでは生まれてこない作品なのは読者も理解していただけたら。物をよく観ることこそ大切である証左。

手^て応^{ごた}
え

貝森
光洋

縫^{ほう}合^{ごう}の皮膚の手^て応^{ごた}え
針^{はり}供^く養^{よう}
駆^くけ出^でせば止^とまるを知らず野^の焼^やきの火^ひ
ある時は野^の火^ひを操^さる農^の夫^とかな
飛^とばぬよう重^{おも}ねてありぬ鶯^の餅^{もち}
寝^ねそべって牛^のさながらの花^の疲^{つか}れ

耕^か
し

水谷^{みづたに}
ひさ江

春^{しゅん}泥^{でい}やわだち一本^{いっぺん}山^{さん}に入^いる
啓^{けい}蟄^{じつち}やうなじに受^うくる雨^のつぶ
耕^かしや畦^いいきいきと甦^{よみが}る
面^{おも}差^さしの夫^{つま}に似^にし雛^{ひな}納^{おさ}めけり
落^{らく}雁^{がん}の鶴^の亀^{かめ}淡^{たん}し雛^{ひな}まつり

蛍雪譚

選後に

山田六甲



春雪や轍を外れし軽四輪

松本文一郎

春の雪の轍あとを通らずわざわざ避けて通ったようなところに軽四輪の運転者の意志を感じさせているのが面白い。

長葱をリュックに差して夫帰る

K O K I A

普段は妻の買い物も手伝わない夫が、珍しく土産に葱を背負って帰ってきた。普段は無愛想な夫だが、こんな優しい面を持っているのだという妻の喜び。いやいや、夫は妻にとつていい鴨なのかも知れぬ。という物語の種を示しただけの佳句。

向き合はせ納められたる内裏雛

池崎るり子

向き合わせられてというのが掲句のミソ。つまり飾られているときは雛はそれぞれに前を向いているだけで、顔を見合わすことはないから、納められているときだけでもせめて向き合っていないさという優しい心遣い。でも雛はこれから一年間ずっと向き合っていないなければならないのに、ああむさ苦しい。思っているかも。

雪 樹 集

黄砂こうさ

池崎るり子

初節句雛の眼まなざし差やさしかり
向き合はせ納められたる内裏雛
満開の紅梅を過ぐ白き雲
車上にも、初雪残る昼の月
黄砂降る今朝の血压平常値

桜前線

武田美雪

しとやかに桜前線北上中
開花宣言月光菩薩げつこうぼさつの背を拜す
咲きました四月の本校事もなく
鶯うすの声のこなれてやよ弥生いじん尽
春雷しゅんらいの思はぬ方より鳴り来たる

六花集

六甲選

北村 満弓

青鷺あおさぎを堰の水音包み込む

水音を聞きつつ宿場町の初夏

水音の合間合間に河鹿笛かしかぶえ

水音と河鹿の鳴ける宿場町

水音を聞き流しつつ青鷺は

小寺ふく子

久永 つう

滝音の飛沫しづきとなりてをどり来る

堰落せきつる春水泡しゅんすいと消えゆけり

滝の水重さ軽さの交りまじけり

滝音や峽かいの景呼ぶ心地して

鮎の水岩を叩きて流れけり

北下きたおろし灯台越えて来りけり

通勤す寒さを足に引きずりて

暖流の早さに消ゆる木の葉かな

冬空へ向ひて深く息を吸ふ

明け方の町に影なす寒月光かんげつこう